



日本プライマリ・ケア連合学会  
四国ブロック支部 活動報告

発行人：板東 浩

事務局 〒761-2103

香川県綾歌郡綾川町陶 1720-1

綾川町国民健康保険陶病院気付

副支部長/事務局長 大原昌樹・松原宛

Tel. 087-876-1185 Fax. 087-876-3795

E-mail oharamasaki@gmail.com

## ★1 へき地医療従事医師を対象とした講演会を開催

四国ブロック副支部長（高知）澤田 努

平成 27 年 1 月 24 日（土）15：30～17：30 に、隠岐広域連立隠岐島前病院 院長の白石 吉彦 先生を高知にお招きして、へき地医療に従事している医師を対象とした「地域医療はおもしろいで！～地域医療の仕組み作りから外来整形エコーまで～」の演題でご講演をいただきました。

白石先生は、自治医科大学を卒業されて、16 年間に渡って離島医療の第一線に従事され、まさに我々の理想とする「総合医」を地道に実践されてきたご高名な先生です。そんな白石先生の離島医療を実際に学ぼうと、多くの若手医師や研修医・学生たちが全国から隠岐に集まってきており、魅力にあふれた本物のへき地医療専門医だと感じました。

白石先生は、「離島発、使える！ 外来診療 小ワ



ザ 離れワザ」という書籍も出されていて、今回はその中に執筆されている様々な主技や臨床に活かせる数々をコツやノウハウ教えていただきました。

特に、整形外科領域で活用できるエコーを活用した診断・治療法については、実際にエコー機器を会場に持ち込んだデモンストレーションも行っていました。受講生が被験者になって、実際に手根管や肩関節、足関節などの観察をしたり、市販のお肉の中に埋め込んだイクラの粒にエコーガイド下で注射器を穿刺して吸引するなど、とてもユニークな内容のセッションもあり、あっという間の 2 時間でした。

先述の通りで、講演の内容は盛り沢山ではありましたが、参加した多くの先生方は日頃使っているエコーに対する意識が変わったようで、へき地医療に従事する我々だからこそ実践できる様々な手技や診断・治療法を目の当たりにしてとても満足されていました。白石先生の今後益々のご活躍をお祈り申し上げます。

日本医師会

赤い賞

「介護と医療」を一つに

白石 吉彦

(島根)



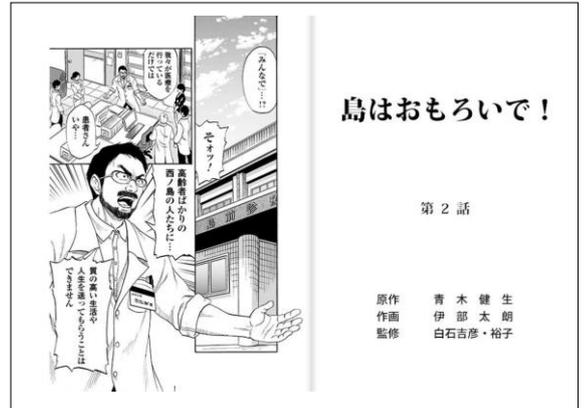
宮川浩和撮影

しらしいよしひこ 隠岐広域連立隠岐島前病院院長。昭和41年、徳島県生まれ。47歳。自治医大卒。徳島大医学部付属病院、国民健康保険相生診療所(徳島県)などの勤務を経て、平成10年から島前町船立立島前診療所(現・隠岐島前病院)に、13年から院長を務める。

なお、白石吉彦先生は、日本医師会による赤ひげ大賞を受賞されています。「介護と医療」を一つに、を重要なテーマとして幅広い活動をされています。

その中には、患者とじっくり対話する、スタッフが集まり情報を共有する朝のミーティング、外部で研修を受けた職員による勉強会を開き学んだ内容を共有する、などが含まれます(#1)。

さらに、先生が監修された医療漫画「島はおもしろいで！」などもインターネット上で閲覧することもできます(#2)。



#1: [http://www.akahige-taishou.jp/case/book/pdf/book2\\_id5.pdf](http://www.akahige-taishou.jp/case/book/pdf/book2_id5.pdf) (日本医師会・赤ひげ大賞)

#2: <https://www.e-doctor.ne.jp/c/special/shimane/manga/02/index.php>

## ★2 愛媛県研究会における最近の活動

四国ブロック副支部長(愛媛)川本龍一

### <四国ブロックポータル発表会のお知らせ>

対象は主に後期研修医、指導医です。愛媛からは家庭養成愛プログラムで後記研修を受けている西予市立野村病院内科の長谷川陽一先生と久万高原町立病院内科の千崎健佑先生が発表の予定です。

日時：3月14日(土)

場所：愛媛大学医学部第2ゼミナール室(予定)

プログラムの概要：

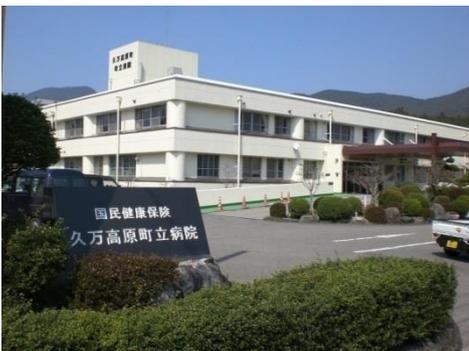
13時～13時半 サイトビジット(後期研修医インタビュー)

14時～15時 レクチャー(「ポータルとは」「ポータル作成の指導の要点」)

15時～17時 ポータル発表会

18時頃～ 懇親会

ふるってご参加をお願いします。



久万高原町立病院



愛媛大学医学部



西予市立野村病院

### ★3 香川県研究会における最近の活動

四国ブロック副支部長（香川）大原昌樹

#### <平成27年度香川プライマリ・ケア研究会・第15回日本プライマリ・ケア連合学会四国ブロック支部・第22回四国地域医療研究会学術集会・合同集会予告>

平成27年1月16日、香川県医師会館において、香川プライマリ・ケア研究会役員（12 職能団体と県）と日本プライマリ・ケア連合学会四国ブロック支部から中津守人先生、横井徹先生と私が出席し、秋に開催予定の学術集会の打合会を行いました。まだ、決まっていない点もありますが、概要をご報告します。

開催日：平成27年11月21日（土）午後～22日（日）12：30頃

大会長：香川プライマリ・ケア研究会 香川県医師会会長 久米川啓先生

日本プライマリ・ケア連合学会四国ブロック支部大会

三豊総合病院地域医療部 中津守人先生

事務局：香川県医師会事務局（担当：長尾、TEL087-823-0155）

会場：1日目 リーガゼスト高松（高松市古新町9-1）

2日目 香川県医師会館3階大会議室（香川県高松市浜ノ町73-4）

テーマ：「プライマリ・ケアにおける人材育成、生涯研修」

プログラム：

1日目：特別講演 鈴木富雄先生（大阪医大）  
PC 連合学会理事長講演 丸山泉先生  
一般演題 多職種による演題発表予定  
懇親会

2日目：臨床推論セミナー  
入江聰五郎先生（入江病院）  
一般演題（主に医師、研修医、学生）  
PC 学会四国ブロック支部総会

案内状、ならびに一般演題募集要項を6月頃、送付させていただきます。ご参加ならびに演題発表をよろしくお願いたします。



### ★4 四国ブロック支部役員紹介（順次記載、本号では徳島）

四国ブロック支部長（徳島）板東 浩

鎌村好孝（徳島県保健福祉部健康増進課、徳島県危機管理部、徳島県立中央病院地域医療科）：

数年前から行政に主体を置きつつ、週に1回程度、山間部での診療に携わっています。へき地や救急医療、地域医療の確保等の政策医療分野から、生活習慣病対策や、母子・心の健康等を担当する健康増進課に3年前から移り、今年度は、危機管理部の災害医療分野も加わりました。平時・災害時ともに、プライマリ・ケア医への期待大です。

白川光雄（海陽町宍喰診療所）：

先生方には第14回四国ブロック支部/四国地域医学研究会 学術集会・合同集会でお世話になりました。徳島県

最南端の海陽町穴喰地区にある過疎地の診療所で勤務しております。教育活動では、徳島大学総合診療医学分野 非常勤講師として主に医学部5年生の『地域医療実習』を担当し、同分野が作成した南阿波総合医・家庭医養成プログラムにも今後は指導医として参加して地域医療に貢献できるPC医の育成に努めます。

**板東 浩** (きたじま田岡病院) :

いつも本学会の活動に感謝申し上げます。徳島大学卒の小松真先生にご指導を賜り、従来、国際交流や広報などを担当させて頂きました。2年後に四国支部が主催する学術総会については何卒よろしく申し上げます。主にPC医学、生活習慣病(メタボ)、糖質制限、アンチエイジング、音楽療法などに携わっております。

**谷 憲治** (徳島大学大学院総合診療医学分野) :

平成19年10月から徳島大学および県立海部病院の地域医療研究センターに所属しています。卒前の地域医療実習から初期研修、後期研修に向けた研修プログラムを作成することで地域医療に貢献する医師の人材育成および徳島の地域医療の向上に向けた研究活動に取り組んでおります。

**藤原真治** (美馬市国保木屋平診療所)

山間へき地の無床診療所にて活動してきています。地域住民と有志薬剤師が、地域医療への貢献を目的としてそれぞれ立ち上げた2つのNPO法人と連携しながら、日常診療を行ったり医学生や研修医を受け入れたりしてきております。

**村山善紀** (村山内科)

当院のある徳島県三好市は(高齢化率38%と、少子高齢化の進んだ地域)です。訪問診療・訪問看護もして在宅ケアを支える多機能型の有床診療所です。グループホーム、デイサービス、居宅介護支援事業所を併設しています。2003年に田坂先生にお会いして先生のような家庭医が、地域に育つことが必要だと痛感しました。

**山口治隆** (徳島大学総合診療医学分野)

平成10年徳島大学卒業後、一貫して総合診療医として技量の向上に努めてきましたが、平成24年からはリサーチをメインとする大学勤務です。地域医療と病気を治す医学の2本柱で、基礎研究から臨床研究、疫学・社会医学研究まで幅広く手がけています。

最近の話題について紹介します。徳島県勝浦郡の上勝町診療所長・木下英孝先生によるプライマリ・ケアに関する講演会が開催されました。

先生は自治医大出身で、長年にわたり地域医療に携わりながら、医学教育や研究会などを含め、多岐にわたる活動を継続してきておられます(徳島新聞2015.2.12 転載)。

今回は、尊厳死を考えるとというテーマで、延命治療や看取りなどを含み、いろいろな側面から、患者の心に寄り添ったお話をされました。

みとりの文化醸成を

### 「本人不在」の延命治療



上勝町診療所 木下所長講演会から

**尊厳死を考える**

終末期医療や尊厳死について考える講演会(くしま尊厳死を考える会主催)が徳島市のふれあい健康館であり、上勝町診療所の木下英孝所長49が、「生き方と逝き方を考える、みとりの文化を取り戻そう」とをテーマに話した。木下所長は、書籍や在宅専門医の意見を引用しながら「延命治療による不幸な長生を減らしていく必要がある」と呼び掛け、みとりの文化を地域で醸成することの重要性を訴えた。要旨を向にけて紹介する。(萬木一郎)

登山家・服部文祥氏の言葉に「死ぬべき時が来たら死ぬべき」という命とは言わねば、という命を大切に考えるなら、生き方とともに、死方も大切に考えなければならぬ。生きていくからには、幸せや生きがいを感じながら暮らすことが大事。人生の最期をどう迎えるか、大切な家族をどうにかみとりたいか、みんなが自分の問題として考える時代。あなた自身が回復の見込みのない病気で死期が迫ったとき、尊厳死を望むのか、それとも延命治療を選ぶのか、手足を動かさず寝返りもできない状態となった高齢者に対し、胃に直接チューブで栄養を送る胃ろうや、のどの穴を開ける気管切開、人工呼吸などの延命治療が行われているケースがある。

胃ろうによって、幸せに生きていくのだから、幸せに長生きできるのであればいい。不幸な長生きなら、滅びていかなければならない。世

界を異視すと、ほんの少しの医療を施せば助かるはずの命が、毎日たたくさ失われていく地域がある。一日日本では、十分適切に死に遊べない高齢者の命を無残に引き止めている。過剰な医療による莫大な医療費と介護費、さらに介護施設を招きながら、そんな延命治療が全国にたくさん行われている。死にたくないのに医療と介護にたづないないか、幸せであってこの長生きを望んでいないか、その人の思いや自己決定を尊重すること。認知症が脳卒中や痴呆で本人の思いが分からないケースがあり、対応が大きな問題となっており、元気なうちに意思表示しておくのが望ましいが、それができない場合でも、その思いを精いっぱい想像してあげることが大事だ。

みとりの文化を、地域で醸成することが大切になる。救うべき命と、みとっていい命、みとるべき命があるはずだ。同じ医療を施すのはおかしい。本当の優しさは何だろうか。親が老衰状態になつて十分な食事を取れなくなったとき、家族はできるだけ長生きしてほしいと願う、何もしないのは見殺しにするようでかわいそうだと感じる人も多かった。医療を施すことで家族はできるだけのことをしてあげたと納得できるのかもしれない。だが、医療が親を苦しめ、尊厳を損ね、本人も望んでいないとしたら、どうだろうか。余計な苦痛を与えずに寄り添い、みとってあげるのが本当の優しさではないだろうか。

安らかな最期とほれるように逝くことであり、体はそれを知っている。食欲がなくなると、食べる量や飲む量が減ることは、薬に逆くために体が準備しているのだ。終末期の脱水は苦しなく、むしろ薬、無理に水分を与えると、むんたり、たんが溜えたりして体に負担がかり、苦しめることがある。体が求めるままに食べたいものや飲みたいものを口にしてもらうことではない。

在宅療養に特に覚悟はいる。何が一番幸せかを考えよう。静かで穏やかな旅立ちを押し、限られた生を楽しく、全うしよう。